

令和6年度 “社会を明るくする運動”可児地区作文コンテスト

小学生の部

社会を明るくする運動可児地区推進委員会 会長賞

「レッテルをはること」

可児市立広見小学校 6年

生田 早絵

ある年の下校時、友達に別の友達と帰ると言われた私は、おもわず強い言葉で友達をなじり、体を押してしまった。私の執着心もあったが、友達がはなれていってしまう気がしてショックでしょう動的にしてしまった。後日話し合いで担任の先生も交えて話し合い、友達と仲直りができた。その時、さみしかった気持ちを上手に伝えられなかった自分を嫌悪し、反省した。だが、数か月後、道徳の授業でいじめっ子の内容が出た。その時に先生が、私と友達とのトラブルを話した。私は、「えっ？私はいじめっ子だったの？」ショックのあまり、授業中、バレない程度に泣いてしまった。事情を知っているクラスメイトは私の方を見ていたが、ゆいいつ隣の席の子は、私をはげましてくれていた。けれども、先生もクラスメイトも私もいじめっ子だと思っているんだと思うと、ショックで学校に行くのがとてもこわくなってしまった。

友達に謝って、仲直りしたのに、人が傷つく言動をしないと決めて、生活していたのになった一度の過ちで、私は一生「いじめをした子」というレッテルをはられて生きていくのだろうかと思い、何日も泣いて過ごした。この社会を明るくする運動について知ったとき、私はこのつらい出来事を思い出した。

私たちは人にレッテルをはってしまっていないだろうか？見た目がこわいから、非行しているから、前科があるから、そんな理由でレッテルをはられてしまって深く傷つき、更生の機会を奪われている人が大勢いるのではないだろうか。私は、家族や先ほど話した友達になぐさめてもらえたことで心が救われた。私も、この先、過ちを犯してしまった人、失敗をしてしまった人に出会うことがあるかもしれない。その時は、レッテルをはって人を見ることはしないと心からちかった。目の前にいる人と向き合ってその人の良いところを肯定していこうと思う。それと同時に、日々の中でもそういうレッテルをはるようなことはしないようにしようと心の中でちかった。そういう人が増えていくことで、社会を明るくすることができるのではないだろうか？